身体の詩学と革新性

ジョン・キーツの詩における詩的昇華／消化の美学

後藤　美映

1835 年、Leigh Hunt は自身が編集主幹であった文芸雑誌 *London Journal* の中で、John Keats の *The Eve of St Agnes* を賞賛する際に、“Lucent syrups, tinct with cinnamon”の一節を取り上げている (Matthews 280)。これは物語詩の第 30 連において、眠る Madeline の傍らで、Porphyro が異国からの嗜好品を取り混ぜたご馳走を皿の上に盛る場面からの引用である。

> While he from forth the closet brought a heap
> Of candied apple, quince, and plum, and gourd;
> With jellies soother than the creamy curd,
> And lucent syrops, tinct with cinnamon;
> Manna and dates, in argosy transferr’d
> From Fez; and spiced dainties, every one,
> From silken Samarcand to cedar’d Lebanon. (264-70)

食べ物を具体的に描出するこの詩行が、近現代の批評においては、中世ロマンスに相応しい舞台を用意するとみなされ、そこでマデラインとポーフィロの愛がいかに成就するかが議論されてきた（Kelley178-79; Graham-Campbell 43）。しかし、興味深いことは、当時、リー・ハントはこの詩行を、「繊細な音の抑揚と実に洗練された美食家が持つ知覚的精妙さ」（“Here is delicate modulation, and super-refined epicurean nicety!”）と評したことである（Matthews 280）。ハントは、「シナモンを染み込ませた、半透明のシロップ」を比喩として解釈するというよりもむしろ、食べ物そのものとして捉え、言葉の聴覚的繊細さに加え、その食べ物を選別し、志向するキーツの味覚の精妙さを評価したのである。キーツに与えられたこの「美食家」“Epicurean”という名こそ、キーツの詩作を解釈する大きな鍵となる。実際、キーツは詩の中で多くの物を食べて飲む美食家の詩人であり、palate（口蓋）といった顕著な身体性を表現する詩人である。

しかし、味覚に代表されるような感覚的なキーツの詩は、当時保守派の文芸批評誌からは、言葉の技巧に走り、詩的着想において未熟であるとされ、卑俗な詩作であると酷評されることが多かった。例えば 1820 年文芸批評誌 *British Critic* は、キーツと同様の美学的趣味の持ち主であるハントを師と仰ぐというまさにその理由において、物語詩 *Endymion* は悪趣味であるとみなした。しかし、注目すべきは、その際にキーツの詩が、悪趣味であることを、皮肉にも食べ物の比喩で評することである。

> The effect of this [Hunt’s advice] upon Mr Keats’s poetry, was like an infusion of ipecacuanha powder in a dish of marmalade. It created such a sickness and nausea, that the mind felt little inclination to analyse the mixture produced, and to consider, whether after all, the dose might not have been mixed with some ingredients that were in themselves agreeable. (Matthews 228)

『ブリティッシュ・クリティック』は、キーツの詩作にハントが悪影響を与えていることを示すために、マーマレードに下剤が加えられ、病気と吐き気という消化不良が引き起こされたという味覚のメタファーを使用して、悪趣味（bad taste）であることを表現している。そもそも taste という語は、身体性を排除した文学的、美学的「趣味」を表現する一方で、「味覚」という味わいや、食べ物を食べるという身体的働きや食欲といった欲望を表現する語である。すなわち、高尚な趣味を問うべき文芸批評において、趣味の欠落したキーツの詩を評するために、敢えて、食べ物を味わうという行為によって象徴される形而下の物質性と消化不良の身体性をメタファーとして使用しているのである。

このように、19 世紀初頭のロマン派の時代において、taste という語は、味覚と美学的趣味という意味の両義性によって、文学的文化的に重要な機能を担っていたのである。この taste という語句が持つ味合いは、18 世紀における taste についての議論を通して形成されることになる。例えば、*The Spectator* 誌上で Joseph Addison が、趣味について語るように、18 世紀は趣味論の世紀ともいえる時代であった (Gigante 47-60)。しかし、趣味論において重要なことは、アディソンが趣味としての判断力を、「魂の能力」（“Faculty of the Soul”）と呼ぶよ

うに (495)、味覚にまつわる食欲や満腹感という身体性は美の判断領域から排除されることである。すなわち、18 世紀の趣味論は、趣味のよい、礼儀正しい自己を生み出していくことを説き、味覚の身体的、感覚的要素を排除した形而上学的な美の判断力を求めていくことになる。

そして、19 世紀のロマン主義の時代において、こうした趣味論は *Blackwood's Edinburgh Magazine*, *Quarterly Review*, *Examiner* といった文芸批評誌を中心にして議論され、、趣味の判断基準を裁定していくことが文壇の役目であると自負される時代となる。印刷された活字を消費する読者の taste は気まぐれで、堕落しがちであり、趣味のよい読者へと導くために、文学や文芸批評が洗練された趣味を大衆に向けて提示するのである。しかし、興味深い点は、ロマン主義の時代が美や真実を判別する判断力を 18 世紀から受け継ぐ一方、消費文化の到来と手を携えて美食学（gastronomy）が登場することを受け、趣味概念から削ぎ落とされてきた味覚の快楽を享受することである (Gigante 166-180)。Jean Anthelme Brillat-Savarin、Grimod de la Reynière、といったフランスのガストロノームはもとより、Charles Lamb、Leigh Hunt らイギリス・ロマン派の文人達によって、舌と味わいの文化が趣味論と肩を並べることになる。さらに文芸批評の誌上において、食べることや飲むという味覚のメタファーが敢えて修辞として用いられ、趣味の悪さを批判するための手法となされたことも興味深い。問題は、このように洗練された趣味を問う時代にあって、趣味を語るために敢えて味覚の直截的感覚を表現し、飲食物とその消化という身体性を打ち出すという詩作が目指したことは何であったのか？美学的趣味と、食べ物を味わい消費することを同列に置き、精神と身体の境界を曖昧にする地平には、近代的詩作の革新性が見えてくる。

キーツの詩は、ハントをして「甘美なものに終わりがない」（"there is no end to the 'nectared sweets'"）と言わしめたほど、感覚の悦楽を身体的メタファーによって表現する（Matthews 281）。例えばキーツは、食事をめぐる昇華／消化と創造性の密接な関係を、*The Fall of Hyperion: A Dream* において再現している。あるいは、『ハイペリオンの没落』は、地上の現実を知るためには、霧や霞を食べる、創られた礼儀正しい身体を持った夢想家についてではなく、飢餓感から食べ物を食べ、消化するという身体的な欲望や快楽を、詩のヴィジョンへと昇華させるための現実の身体を哲学する詩人についての物語詩ともいえる。『ハイペリオンの没落』の創作に至るまでに、キーツの詩は、食べる身体や味覚のイメージにおいて大きな変化を経るが、『ハイペリオンの没落』においては、詩人が「透明な果汁」を飲み、自分自身の痛みを経験した後に、モネタの脳に刻まれた、タイタン族の悲哀と、それを宿すモネタ自身の痛みを味わうことによって、人間性の悲哀の歴史と他者の痛みを「味わう」物語となる。

このように味覚の詩人キーツにとって、趣味という洗練された詩の創作が美学的規範だとみなされた時代に、敢えて味覚の身体性を唱えることは、身体という在り方がより現実の人間の感情を想起する場であることを表明することであったと考えられる。あるいは、キーツの詩は、身体性を排除した趣味に基づく詩が、判断力という名の下に、階級や党派、出自を問うといった排他性を保持していたことに対抗し、現実の身体と言葉の融合によって生まれる詩を敢えて呈示したともいえる。こうしたキーツの詩において、身体内部で消化された言葉は、美学的概念においても、医科学的概念においても近代的な革新性を宿していたと考えられる。

Works Cited

Addison, Joseph. *The Spectator: A New Edition with Biographical Notices of the Contributors*. Cincinnati, 1853.

Gigante, Denis. *Taste: A Literary History*. Yale UP, 2005.

Graham-Campbell, Angus. " 'O for a Draught of Vintage': Keats, Food and Wine." *Keats-Shelley Review*, vol. 17, 2003, pp. 42-60.

Keats, John. *The Poems of John Keats*. Edited by Jack Stillinger. Harvard UP, 1978.

Kelley, Theresa M. "Keats and 'Ekphrasis': Poetry and the Description of Art." *The Cambridge Companion to Keats*, edited by Susan J. Wolfson, Cambridge UP , 2001, pp. 170-85.

Matthews, G. M. *Keats: The Critical Heritage*. Routledge & Kegan Paul, 1971.